

人形姫

山本幸久

第三回

3

スマートフォンが細かく震えているのに気づいた。画面に表示されたのは二歳下の弟の名前だ。一瞬シカトしようかと思ったが、それも大人気ないとでることにした。

「よう、兄貴っ」

スマートフォンに耳をあてると、慎次しんじの能天気な声が聞こえてきた。十代なかばには挨拶あいさつどころか他人の顔を満足に見ることができなかつたくせに、と思ってしまう。

本社ビル一階の事務室に恭平きやうへいはひとりだった。今日はひとに会う約束がなく、日がな一日、作業場で雛人形ひなにんぎょうの頭をつくるだけだからだ。

経理部長こうだの幸田こうだは朝からいない。代官山だいかんやまにあるフィギュア事業部

に直行して、今日は戻ってこないようだ。事務方のパートさんふたりは、四階で人形の着付のパートさん達と弁当を食べているはずだ。いまは昼休みなのだ。恭平は窓に背をむけて自分の席に座り、近所のコンビニで購入したソースカツ丼を頬張っている。

祖父や父、弟も徒歩十秒の自宅で昼飯を食べていた。でもそれは祖母や母がそのための支度をしていたからだ。いま自宅には昼間、だれもない。いや、朝も夜も一日中だ。弟がいま暮らしているのは、フィギア事業部がある代官山間近の賃貸マンションだった。

「なんだ？」

箸を置き、やはりコンビニで買ったペットボトルのお茶を飲む。

「溝口みぞぐちさんの雛人形、どうだった？」

「驚いたよ」

恭平は正直に答えた。溝口が会社に自作の雛人形を持ってきたのは一昨日のことだった。

「おまえはあれを見たことがあるのか」

「スマホで撮った写真を見せてもらった。親父が描いた顔と瓜二つだったろ」

「顔だけじゃない。髪や手足、着物、それに冠かんむりに笏しやく、太刀、桧扇ひおうぎなどの小道具に至るまで寸分たが違わず、ウチの雛人形そっくりそのままだった」

「昭和から平成に跨またがって発売してた、一九八八年タイプだよね」
「そうだ」そこで恭平は思いだしたことがあった。「彼女、七歳上の姉がいてな。雛人形はその姉と共有していたらしい」

「なるほど、そっか」慎次はすぐに納得した。「彼女の姉さんが生まれた年にウチの会社のを購入したわけか」

「その姉さんはアメリカ人と結婚して、ニューヨークに住んでいるんだが、去年末に女の子が生まれたからと、その雛人形を送ってしまっただと」

「そうだったんだ」

「おまえ、彼女から聞いてないのか」

「全然」

慎次の返事に恭平は思わずほくそ笑んでしまう。どんな些細ささいなことであれ、生意気な弟よりも優位なのは気分がいいものだ。

すると突然、弟が怒鳴どなりたてた。日本語ではなく中国語なので、恭平にはまるで意味がわからなかった。

「どうした？」

「悪い、悪い。俺いま、中国でさ。工場ん中を回って歩いててね。いまのはフィギュアの塗りが甘いスタッフがいたから、注意したんだ。その場で直に言わないと駄目なんだよね」

慎次が中国語を話すのを目の当たりにしたのは、親父の葬儀のと

きだった。火葬場で親父が灰になるのを待っているあいだ、廊下の片隅で慎次がスマートフォンにむかって、中国語で捲まくし立てていたのだ。

中国のみならず、台湾やベトナム、シンガポールなど海外から慎次が電話をかけてくるのも珍しくない。最近はとみに増えた。それに比例して、フィギュア事業部の売上げも右肩上がりです。衰え知らずだ。十代なかばは登校拒否で、自室に籠こもりっぱなしだった弟とは同一人物とは思えないくらいフットワークが軽くて、アグレッシブと言ってもいい。

いまや恭平のほうが引きこもりに近い。自室にこそ籠こもっていないものの、徒歩十秒の自宅と本社ビルを行き来するだけの毎日だ。商談や組合の会合もたいがい鐘撞かねつき市内である。会うのもごく限られたひと達ばかりだ。

カノジョでもいれば、遠出もするだろうが、元妻の浮気のせい、男としての機能に不具合が生じた身には、そんな浮いた話があるはずがなかった。

なくはなかったが、あれは。
忘れかけていた女性の姿が、ひさしぶりに脳裏にちらつく。だがそれも弟の声で掻き消えていった。

「溝口さんの人形は職人さん達にも見せたの？」

「ああ。みんな揃って見てもらったよ。幸田さんもな」

「驚いていただろ」

「つうかショックだったみたいだ。見た途端、全員フリーズしてた」

「はっはっはっは」弟は快活に笑った。こんな笑い方も十代の彼はしなかったものだ。「自分達が長年つちか培った技術を、若いお嬢さんがあっさり完コピできちゃっていたからだろ？」

「あっさりってわけでもない。話を聞いたらいろいろ試行錯誤の末、完成するまでに二年半もかかったって、彼女は言ってた」

「だけど創業百年を超える老舗しにせのウチが、わずか二年半で追いつかれたってことじゃんか」

「そう言えなくもない。」

「要するに頭師かしらしの宮沢さんみやざわを筆頭に、あのひと達は職人でございってふんぞり返って、昔ながらの伝統だとか、受け継ぐべき文化とか言ってるうちに、どんどん世間から取り残されちまった過去の遺物なわけよ」

「そこまで言わなくてもいい。」

「で？ 溝口さんのこと、どうするつもり？ あんだけの逸材、そうはいないぜ。桜井さくらいさんいにしたって、あれほどじゃなかった」

恭平は危うくスマートフォンを落としかけた。ついいましたがたまたで脳裏にちらついていた女性の名前を、慎次が口にしたからだ。さ

らに弟はつづけた。

「そう言えば兄貴、なんで桜井さんの個展にいなかったの？ 先月、六本木ろっぽんぎであつたヤツ」

「いこうとは思っていたんだが」

しかしなんだかんだと用事が埋まっていき、いけなかったのだ。嘘だ。ほんとはいこうと思えばいけた。個展の開催中には珍しく都心で商談があり、その帰りに寄ることもできたのだ。

「招待状、きてたんだろ。メールで在廊の日も送ったつて、桜井さん言つてたぜ」

「おまえ、個展にいったのか」

「最終日滑りこみでね。それも海外出張の帰りで、成田から直行したんだぜ。なのに会うなり彼女、なんて言つたと思う？ 社長はこいつしよじゃないんですかだつて。やんなつちまうよ、まったく」

そこでまた恭平はひとりほくそ笑む。

「いけばよかったのに。彼女がつくつた人形、マジよかったぜ。雑誌やインスタで見たことはあつたけど、実物はやっぱちがうね」

桜井桃枝ももえは森岡人形で三年半、働いていた。頭師ではあつたが時間があれば他の職人の元にいき、教えを乞うていた。これに宮沢が腹を立てた。頭師は頭だけを作るべきで他の職人の仕事に首をつっこむなど言つたのだ。しかし桜井は聞く耳を持たなかつた。

さらに鐘撞市内のみならず、日本各地の人形制作の現場に自腹で足を運んでは、恭平や職人達にどこその作り方がよかったので、ウチでも取り入れたらいかがでしょうかと提案することもしばしばあった。俺のやり方に不満があるのかと、これにも宮沢が怒り心頭で桜井と揉めに揉めた。宮沢は頑固だが、桜井は負けん気が強い。なので朝っぱらから職場で怒鳴りあい、お互い一步も引かず、仕事が進まないこともあったくらいだった。結局、折れたのは桜井だった。辞めて日本人形作家として独立したのである。

「展示してたのが、人形だけじゃなかったんだ。兄貴、知ってたか？桜井さんが映画や舞台の衣裳をつくってたの？」

「らしいな」

じつはよく知っていた。彼女のホームページやツイッター、インスタグラムなどを時折、チェックすることがあるからだ。ここ五年のあいだ、桜井は瞬またたく間に活躍の場を広げていた。

「そのへんのも展示してさ」弟は人気女優の名前を言った。「えらくキレイなネーチャンがいるなあと思ったら、その女優でさあ。彼女が主演の映画の衣裳も桜井さんが担当してたんだって。すごくね？」

「ああ」

すごい。この五年で自分には手が届かない存在になってしまった。

そう思っていると、弟がまた中国語をしゃべりだした。今度は怒っていない。言葉はわからないでも、褒めているのは口ぶりでわかった。

「桜井さんの話をしてる場合じゃないや」話したのはおまえだろうが。「溝口さんはどうする？ 兄貴んところで働いてもらおう？」

「いまはまだ、代官山でバイトしているんだよな。フィギュアの原型師の手伝いしているって」

本人にはなく、経理部長の幸田に聞いた情報だ。

「そうそう。それがまた達人なんだ。ウチとしては惜しいけど、本人の希望を尊重すべきだからね。彼女、いまは大学院生で来春には卒業でしょ。社員として採用しちゃったら？」

「ああ」おまえに言われなくても、そのつもりでいたさ。

「それまでは週二ぐらい、バイトとして、きてもらえば？」

「でもあの子、住まいは都内だぞ」

美大のそばに暮らしていた。鐘撞市まで片道で二時間以上はかかる。
る。

「そんなら通勤圏内だよ。ウチの部署に江ノ島えのしまから通ってる原型師いるし」

言われてみれば、元の会社でもずいぶん遠くから通っているひとはいた。そこまで話していて、恭平ははたと気づいたことがあった。

「自分のつくった日本人形を俺に見せるよう、おまえが溝口さんに勧めたのか」

「はっはっはっは」弟はまた快活に笑った。さきほどよりボリュームが大きく、恭平は耳からスマートフォンを遠ざけた。「兄貴、俺はフェミニストだぜ」

なにを言いだすんだ、こいつは。

「旧態依然でガラパゴス島みたいな場所に、若い娘さんを送りこむようなヒドい真似はしない」

ずいぶんな言い様だ。しかし恭平は言い返せなかった。弟の言う通りだからである。

「本社で働くことができないか、彼女が相談してきたんでどんなところか、事細かに教えてやったんだ。それでも働きたいと言うんで」

社長に直談判を試みたらどうかとは言ったらしい。そして先日の人形供養くよに連れてきたのだという。

「だけど兄貴もせっかちだよな。人形を見てほしいうって溝口さんが言ったら、つぎの日の午後を持ってこさせるなんてさ」

「彼女のほうで、急いでいるように見えたからだ」

「はっはっはっは。まあ、いいや。それじゃ、こっちはそろそろラシチなんです、もう切るぜ」

壁時計を見ると十二時四十分だった。中国との時差が一時間だと

弟に聞いたのを思いだす。恭平がスマートフォンを耳から放そうとしたところだ。

「兄貴、なに食ってんの？ またコンビニの弁当？」

「ソースカツ丼だ」

「自らの欲望に忠実な食事ばつかしてると、ビョーキになるぜ。会う度にデブになってるじゃんか」

余計なお世話である。性欲がままならなくなっただけ、食欲だけでも満たしたいのだ。

「身体、動かせば？ 俺みたいにジムに通うとかさ。鐘撞にも駅前

にスポーツジムがあるだろ」

弟にこんなことを言われる日が訪れるとは、思ってもいなかった。

恭平はスポーツ万能で、高校の三年間はボート部に所属、二年生で

キャプテンを務め、その年にはインターハイで優勝した。ひるがえ翻って

慎次は運動神経が鈍く、体育の成績もヒドかった。スポーツと名が付くものはひとつもしたことがない。ジム通いでマッチョになっただけ、いまでも、キャッチボールひとつできないはずである。だがいちいちそれを言う気も起こらない。

「考えておくさ」と短く答え、電話を切った。

三分の一は残っていたソースカツ丼を平らげ、ペットボトルのお茶で流しこんだ。一杯になった腹を右手で擦る。弟の言うとおおり、

だいぶ出っ張ってきた。つぎに左手で顎あごの下に触れてみると、ここにも肉がつきはじめているのがわかる。

ジムにいかずとも、ジョギングか縄跳びくらいしてみつかないかな。

しかしなんのために、痩せてスマートになるのだと思わないでもない。女にモテたいから？　モテたとしてもその先、なにもデキないではないか。まずはそつちを治すべきだろう。

その手の病院については、ちよくちよくネットで検索をしていた。だがいまいち踏ん切りがつかない。そうこうしているうちに十年近く経ってしまった。ふたたび桜井桃枝の顔が脳裏にちらつく。

桜井が日本各地の人形制作の現場を見て歩き、よその優れた技術をウチに取り入れようと言いだしたのはまずかった。宮沢のみならず、他の職人達も敵にまわすことになったからだ。おかげで恭平が少しでも桜井の意見を取り入れようものなら、職人達から突き上げを食らうほどだった。

五代目、ダメされてはいけません。ああいう虫も殺さない顔した女がいちばん怖い。私にはわかるんです。私が女を見る目はたしかですからね。

恭平に忠告するように言ったのは、鐘撞市の玉三郎たまざぶろうこと、着付師の遊木陽一ゆぎやういちだ。そうよ、そうそう、そうに決まっていると小道具師

の阿波三姉妹が同意した。そのうえだ。

あわよくば五代目と結婚して、会社を乗っ取るつもりだわ。

三姉妹のうち、だれが言ったかはよく覚えていない。俺は男性機能が使いモノにならないので、結婚をしても無駄だとはさすがに言えなかった。そして四面楚歌しめんそかとなった桜井を守れなかったどころか、引導を渡したのは恭平だった。社長室にきてもらい、職人達とは揉めないよう一対一で話したところだ。

つまり私がいなくなれば、すべては丸く収まるわけですね。

ちがう。そんなことは。

わかりました。辞めます。

そう言い切ると、桜井はすっと立ち上がった。恭平が引き止めても無駄だった。しかし社長室をでていく際に、桜井は恭平を見上げて言った。

社長もお辞めになったらいかがですか、この会社。いっしょにくりたい人形、つくりましょうよ。

「社長」

昼休みがおわる十分前だ。事務室のドアが開き、熊谷良隆くまがいよしたかが入ってきた。親子ともども手足師ではあるが、息子の良隆は営業も兼任している。いま背広姿なのは、午前中、外回りをしている戻ってきて

たからだ。

「朝からご苦労だったな。どうだった？」

今朝、良隆がむかった先は都内にある通販会社だ。この十年、森岡人形の雛人形を取り扱ってもらっていた。そろそろ来春の節句にむけて、ネット上でどう展開するのか、どれくらいの受注数が見込めるかなど、詰めていく時期となり、良隆も忙しくなった。営業と職人の仕事の割合は七対三といったところだろう。恭平とおなじ高校のおなじボート部の後輩ということもあり、社内で唯一、気楽に会話ができる相手である。

「いいニュースと悪いニュース、どっちから聞きたいですか」

良隆は海外ドラマみたいな台詞せりふを言いながら、空いた席の椅子を持ってくると、デスクを挟んで、恭平のむかひに座った。

父親似の体格で背が高く、がっちりはしているものの、毛深くはないし、髭ひげも蓄えてはいなかった。肌の手入れを日々かかさずしており、同年代の女性よりも肌艶はだつやがよくてテカテカ光っていた。ビリケンさんみたいだと言ったのは関西から嫁にきたパートさんだ。良隆本人はビリケンさんを知らず、ネットで検索したらしい。そのあと髪型をソフトモヒカンにして、よりいっそうビリケンっぽくなった。いまもそうだ。

「いいニュースからにしてくれ」

「社長の提案が通りました。海外向けにサイトの紹介文を英語と中国語、韓国語に変換できるようにしますって」

ここ数年、雛人形は海外からの受注が増加していたのだ。じつを言えばどこかよその国で、雛人形の展示販売ができないものかとも考えているが、実現のメドは立っていない。

「悪いニュースは？」

「おなじサイトで、個人の人形作家の雛人形も扱うようになったそうです。ぜんぶで十人くらい。それぞれ三点から五点限定で、値段もウチの一・五倍から二倍はするらしいんですけどね」

「競合相手が増えたってわけか」

なるほど、悪いニュースである。

「その十人の中に桜井さんがいました」

「ウチを辞めた？」

「もちろん。他にだれがいるって言うんですか」

それはそうだが。まさかこんな短時間のうちに、桜井の話が二度もでるなんて。

「個展で飾ってありましたけどね。ちょっとエキゾチックで、それこそ外国人受けしそうな雛人形でしたよ」

それならば桜井のホームページにアップされているのを、見たことがあった。

「おまえも個展にいったんだ」

「いきましたよ。いまや押しも押されぬ新進気鋭の日本人形作家ですもん。あれ？ おまえもってことは、社長もいったんですか」

「俺は都合がつかなくていけなかった。でも弟はいったらしい。いまして電話で聞いたんだ」

「花、送ってましたよ、あのひと」

個展の会場入口にけっこうな数の花が並んでいたらしい。その中に弟が送った花があったというのだ。

「桜井さんがウチにいた頃、あのひとがちよっかいだしてたの、社長、覚えてるでしょ」

当時のフィギュア事業部は代官山ではなく、本社から車で五分程度の雑居ビルにあった。さしたる用もないのに、弟は本社にあらわれ、ときには作業場にまで入りこみ、桜井に話しかけていた。その頃はまだ、慎次はマツチョでなかったはずだ。

「結局、相手にされなかったみたいですけど。再チャレンジするつもりなんですかね」

「さあな」

弟にカノジョがいようとまいと関係ない。そもそも生まれてこなかった、兄弟でプライベートな話を一切したことがないのだ。

その代わりではないが、良隆の私生活についてはよく知っていた。

月に二、三度は呑みにいくのだが、その際、訊ねてもいないのに、どこでどういうきっかけで女性と知りあい、LINEでやりとりし、三回目のデートでラブホに誘って、どんな体位で何度ヤツたのかまで、明け透けにペラペラとしゃべるのだ。それも酔っ払っておなじ話を何度も繰り返すことも珍しくなかった。

今年の一月にさいたまスーパーアリーナで開催された雛人形の大奉仕会で、よその人形メーカーの女性をナンパし、しばらくつきあっていたものの、夏がおわると同時に別れてしまった話は、すでに三度聞かされていた。つい先だって呑みにいったときでもある。

さらにはアヒルバスなるバス会社で開催しているお見合いツアーに、ふたりで参加しませんかと誘ってきたのだが丁重に断った。男性機能がいまの状態では再婚相手を選んでも意味がない。

「まだなにかあるのか」

いいニュースも悪いニュースも聞きおえた。しかし良隆はまだ目の前にいて、なにか言いたげだったのだ。昼休みもじきにおわる。

恭平は二階に上がり、頭師としての作業をしなければならぬ。

「親父に聞きましたよ。一昨日、職人希望の女の子がきたそうですね。なんでもえらく完成度の高い雛人形をつくってきたとかで」

「ああ。スマホで写真、撮っというたんで見るか」

「ぜひ」椅子ごとデスクに近づいてきた良隆に、自分のスマートフ

オンを渡す。

「いまも弟と話していたんだが、昭和と平成の境に販売したウチのを完コピしててな。完成までに二年半かかったって言うんだが、それでもたいしたもんだろ」

「え、ええ。まあ」画面を見ながら、良隆は納得がいかない顔をしている。

「どうした？」

「人形はほんと素晴らしいんですが、俺はあの、てっきり女の子の写真だと思って」

そっちかよ。

そう思いながらも、デスクの引きだしから溝口の履歴書をだして、スマートフォンと交換する。

「かわいいじゃないですか。証明写真でこんだけかわいいんだから、実物をもっとかわいかったでしょ？」

そんなにハシヤがなくてもよろしい。

「感じのイイ子ではあったよ」

「辞めちゃった子も悪くなかったんですけどなあ。なんか神経質そうで、じつは俺、苦手だったんですよえ」

良隆はけっして悪いヤツではない。手足師としての腕は父の道隆にだいぶ劣りはするものの、人当たりがよく、社内外での人気も高

い。ひとの懐ふとこにいとたやすく入っていけるのだ。それゆえ営業としても優秀だった。日本人形の売上げは低迷気味で、このうえ良隆がいなければ森岡人形はいよいよもって立ちゆかず、弟のフィギュア事業部だけになっていたにちがいない。そう思うとゾツとする。ただどうも、良隆には女性を外見で判断するきらいがあった。顔ひしやうの美醜びしやうやスタイルのよしあしに、やたら厳しい。営業先や同業者、通行人など目につく若い女性に点数を点け、恭平に「社長はいまの子、何点ですか」と訊ねてきたりするのだ。

キャバクラやガールズバーで、自分に付いた子が好みでないと「ブスには用がない」とそっぽをむいて一言もしやべらず、恭平が女の子達に気を遣う羽目になるのも珍しくなかった。

しかも「嫁さんにするのは二十代なかばまでが限度だよなあ。三十歳オーバーは勘弁」なんて平気で言う。おなじ口で「どうして俺、結婚できないんですかねえ」とボヤクのだが、そういうとこだぞと指摘したところで、本人はピンとこないだろう。

だいたい弟が桜井にちよっかいをだしていたと嬉々として語っていたが、かく言う良隆もだった。相手にされなかったところまでおなじである。個展にいったのは良隆もまた、再チャレンジするつもりではないかとも思う。

「採用するんですか、その子？」

「そのつもりではいる。いまはまだ大学院生なんで、しばらくバイトにきてもらって、正式の採用は卒業後の来春にするつもりだよ。でもまだ本人には伝えてはいないんだが」

「楽しみだなあ」

履歴書の小さな写真を見つつ、良隆は言った。桜井のときのように、ちよっかいをだすのは勘弁願いたい。ただでさえ宮沢がまた、厄やっかいなことをしでかすのではないかとハラハラしているのだ。

こうして考えていくと、我が社で働かないほうが溝口真純ますみにとつてイイのではないかと思えてきた。事実、桜井桃枝は、会社を辞めてからのほうが順風満帆じゆんぷうまんぱんである。

チャイムが鳴った。昼休み終了の合図だ。良隆から履歴書を返してもらい、恭平は立ち上がった。

「よっこらせ」

「やだな、社長」良隆が笑った。「そんな掛け声ださないと立てないなんて、オッサンですよ」

三十代もなかば過ぎだ。認めたくはないが、紛まじうことなきオッサンだし、出っ張った腹が邪魔でもあった。身体、動かせば？ と弟に言われてしまうのも当然である。

「なあ、クマ」

高校時代の呼び名で良隆を呼ぶ。彼も立って、椅子を元の位置に

戻しているところだった。

「なんです？」

「ボート部のほうはどうだ」

「頑張ってますけどねえ。俺達ときみたいには、インターハイで優勝ってわけには、なかなかいきませんよ」

「今度、見学にいつてもいいかな。できれば後輩達に混じって、やってみたいんだが」

「そりやかまいませんけど、だいじょうぶですか？ マジしんどいですよ」

良隆に真顔で言われ、恭平はいささかビビる。しかしだったらやめると撤回するわけにもいかなかった。

「無茶はしないさ」

そう答えたものの、良隆から返事がない。まん丸に見開いた目を窓の外にむけている。なにかと思ひ、恭平はふりむいた。

「なんでだ？」

舗道から敷地に入ってくる女性がいた。さほど離れていないので、顔も確認することができた。溝口真純にちがいはなかった。人形供養のときはワンピース、一昨日はリクルートスーツだったが、今日はチェック柄の長袖シャツにジーンズ、そして背中にはリュックサックと、ピクニックにでもいくようなラフな格好だ。溝口にはそれが

いちばん似合っており、いちばん素の彼女に思えた。恭平と良隆の視線に気づいたのだろう、顔をこちらにむけ、歩きながら会釈えしやくをした。

「俺、迎えにいつてきます」

迎えにいくほどの距離ではない。しかし良隆はそそくさと事務室をでていく。恭平もスマートフォンをジャージのポケットに突っ込み、そのあとを追った。

「はじめまして、俺、いや、わたくし営業および手足師をしております熊谷良隆と申しまして」

「は、はあ」溝口は面食らっている。それはそうだ。くるなり肌艶がいい大男が、なんの前置きもなく、自己紹介を شدしたのだ。驚かないほうがどうかしている。

「あの」恭平はふたりのあいだに割って入った。

「あつ、社長さん。先日はありがとうございます」

「今日はどうしてここに？」

「え？」溝口の眉間にわずかな皺ができた。「今朝八時前に、宮沢さんからスマホに電話をいただいたんです」

「そんな朝早くに？」

「今日の昼一時に会社にくるようにと言われたのですが、社長さん

はご存じなかったんですか」

「宮沢さんが？ 間違いないかい？」

「間違いございません」

そう答えたのは宮沢本人だった。階段を徐おもむろに下りてきながらで、その口調はどこか芝居がかった。

「どうやって彼女の電話番号を」

「五代目の机にあった履歴書を見させてもらいました」

机にあったって、引きだしの中でしょうが。

いつ何時でも仕事ができるようにと、会社の鍵は職人達が各自持っている。ただし社内それぞれの部屋には鍵はなく出入り自由だ。事務室もそうだ。

恭平が徒歩十秒の自宅から出社するのは、だいたい八時半前後で、今日もそうだった。会社にむかうあいだ、宮沢の自転車がすでにあのを見つけ、もうきているのかと驚いた。いつも早くても十時過ぎ、遅いと昼をまわるときもある。そういうときはたいがい前日に呑み過ぎて酒臭かった。

今朝、会社にいちばん乗りしたのは、要するに溝口の履歴書を盗み見るためだったわけだ。たぶん恭平のデスクにある電話を使ったのだろう。宮沢はスマートフォンどころか携帯電話も持っていないのだ。

「なんで溝口さん呼びつけたんですか」

恭平は宮沢に訊ねた。当然の質問だろう。

「テストをしようと思ひましてね」

宮沢は上目遣いで答える。

「彼女をですか」

「ええ。一昨日、雛人形を見せてもらいはしましたよ。あれはまあ、素人さんにしちやあ、まずまずの出来と言っていていいでしょう」

なにがまずまずだ。強がりもいい加減にしろって言うんだ。一目見るなりフリーズしていたくせして。

恭平がそう思っている横で、溝口が深々と頭を下げた。

「ありがとうございます。一昨日は人形についてどなたもなにもおっしゃってくださらなかったもので、心配だったんですよ」

それはみんながみんな、その出来映えに戦でき、言葉おのを失ったからだよとは言い難かった。いつの間にか階段から職人とパートさんが下りてきて、玄関口はひとで一杯になっていたのだ。

恭平と良隆以外の職人はぜんぶで八名、いずれも六十歳オーバーのベテランばかりである。こうして一同が揃っているのを改めて見ると、この会社に未来はないなと思わざるを得なかった。十年後、いや、五年後だってどうなっているか、わかったものではない。

「じつは昨日、仕事おわりに私どもでファミレスにいったって、ちよっ

とした会合を開きましてね」

宮沢が言う私どもとは職人達のことにはがいない。

だけどなんだ、ちよつとした会合というのは。

「いま申しましたように、お嬢さんがおつくりになった人形の出来は悪くなかった」

「でもほら、ほんとにあなたひとりでつくったのかどうかってね」

いきなり須磨子すまこが口を挟んできた。三姉妹揃って小道具師の長女である。

「あたしが一からぜんぶつくりました。だれにも手伝ってもらっていません」

「私が言ったんじゃないわよ」溝口に鋭い声で言い返され、須磨子は慌てだした。「勢津子せつこと多香子たかこがそうじゃないかって」

「ちよつとやだ、スウ姉さん。なんでひとのせいにするの」と次女の勢津子が言う。

「そうよ。言いだしたのはスウ姉さんじゃない」これは三女の多香子だ。

「私はあれだけのモノをひとりでつくるのは大変よねって言っただけじゃない。それをあなた達が、ひとりのはずがない、だれか手伝ったはずだと」

「そうは言っていないせんっ」「そうよ、協力したひとがいてもおかし

くないって」

「お三方ともお静かに」遊木陽一だ。着付師の彼はいつもどおり着物姿で、隣には三歳下の奥さんが控えていた。「いまここで言い争うことですか」

「それはまあ」「ちがうけど」「でもねえ」

三姉妹はブツブツ言いながらも声を潜めた。

「それより」遊木は恭平に顔をむけた。「五代目はこの子を呼ぶ話をご存じない？」

「いまはじめて聞きました」

「お嬢さんは」遊木の視線が溝口に移る。「今日、ここでなにをするのか、今朝の電話で聞いていない？」

「午後一時にくるようにとだけ。あと、そうだ、普段着でかまわな
いとも」

「だから俺が言っただろ」良隆の父親、熊谷道隆が野太い声で言った。「こういう連絡事を宮沢さんに任せちゃ駄目だって」

「この子はちゃんと一時にきたんだから、いいだろが」宮沢が面倒臭そうに言い返す。「テストについては、きてから話せばいいと思っ
たんだ」

「ではどうして五代目には言わなかったんです？」

遊木がさらに問い詰めた。鐘撞市の玉三郎だけあって、穏やかで

物腰の柔らかい口ぶりなのが却^{かえ}って怖い。

「いや、それは、あの」

宮沢はすっかり気押され、口ごもるばかりだ。

「そうですよ、宮沢さん」おなじ頭師の峰三郎^{みねさぶろう}が、ここぞとばかりに言った。「午前中、五代目に言ったんですかって私が聞いたら、ああってお答えになっていましたでしょう？」

「うっせえなあ。五代目が二階にあがってきたら言おうと思ったんだよ。でも今日は午前中、こなかったから、言いそびれちゃったんだ」

午前中はデスクワークにおわれ、事務室からでなかったのはたしかだ。だからといって俺が悪いように言われてもなと恭平は思う。言い訳にしてもヒドい。逆ギレもいいところだ。職人達^{あき}も呆れて二の句が継げなくなっていた。

「それである」溝口が右手を挙げた。「テストとおっしゃっていましたが、あたしは具体的になにをすればよろしいのでしょうか」

「さきほども話にでしたが」軽く咳払いをしてから、遊木が話した。「やはりあれだけの人形を、あなたのような若い女性がつくったとは信じられないのです」

溝口の唇が微^{かす}かに開く。だがすぐさま一文字に閉じた。なにか言おうとしたのを堪^{こら}えたにちがいない。遊木の話はなおもつづく。

「できればあなたが人形をつくるところを、実際に見せていただきたい。ぜんぶだなんて無茶は申しません。頭だけでよろしいので」
「それって原型からですか」

溝口が聞き返す。その表情は少し険しくなっていた。当然である。頭だけとは言っても完成するまでの工程は半端ではないからだ。

まずは木彫りで原型をつくらねばならない。これを元に樹脂じゆしを用いて、前後に分けた抜型をつくる。そこに桐塑とうそという桐粉きりこを生麩糊しようふのりで練ったものを入れ、しっかり固まったら抜きだし、前後の合わせ目のギザギザした部分や表面に付いたカスやゴミを取り払い、完全に乾いたところで磨きをかけ、滑なめらかにして義眼はを嵌めこむ。そして貝殻でできた白い顔料である胡粉こふんと、動物や魚類の皮や骨などを精製してできた膠にかわで下地塗りをおこなう。そのつぎは置上げと呼ばれる作業で、目や鼻、口、顎などをやはり胡粉と膠で盛り上げていく。これが済んだら、ぜんたいをまた胡粉で幾度も塗りあげ、目、鼻、口を小刀で彫る。さらに胡粉を塗って、眉に口紅、生え際を筆で描き、仕上げに磨いてようやく完成だ。

「生地押しからやってもらう」

宮沢が言った。作務衣姿さむえで腕組みをして、ふんぞり返っている。本人は格好をつけている気だろうが、傍目はためにはまずいラーメン屋の店主にしか見えなかった。生地押しとは抜型に桐塑を詰める作業だ。

こうなったらやってもらうしかない。しかしだ。

「半日ではとてもじゃないが、おわらないでしょう」恭平は言った。

「少なくとも一日二日は通ってもらわないと」

「全然かまいません。やらせていただきます」溝口が言い放つ。彼

女もいつの間にか腕組みをし、宮沢をはったと睨にらみつけていたのだ。

「その出来次第によって、こちらの会社で働けるかどうか、決まるわけですよね」

「もちろんだ。よござんすね、五代目」

「ああ」宮沢に訊かれ、恭平はそう答えるしかない。

「わかりました」溝口は腕を解くと、右腕の肘ひじを曲げ、顔の横で右手の拳をぎゅつと握りしめた。「がんばります」

「かわいい」良隆の呟つぶやきが恭平の耳に入る。

やれやれ。

ともかく溝口を二階の仕事場に連れていき、辞めてしまった子の作業机を使ってもらうことにした。そして生地押しのための準備にかかる。

だれが？ 恭平がである。峰はさっさと自分の作業をはじめてしまおうし、宮沢はエラそうに腕組みをして眺めているだけだからだ。

やんなっちゃうな、まったく。

「あたしがつくったのと出来がちがいます」

恭平が運んできた抜型に顔を近づけ、舐め回すように見ながら、溝口が言った。

「素人がつくったのとおなじじゃ困る」

腕組みをしたままで宮沢が言う。えらく険しい顔つきだが、わずかに唇が綻んだ。満更でもないらしい。

「ですよねえ。すみません、原型も見せてくださいませんか。もしよかったらでイインですけど」

「かまわんよ」あっさり宮沢が承諾した。「五代目、持ってきてあげてもらえませんか」

はいはい。

「すごおい」

頭の原型を見るなり、溝口は声をあげた。興奮からか、ほんのりと紅潮している。鼻息が荒くもなっていた。

「これってやはり社長さんが」

「いや」

「私です」作業の手を休めずに峰が答える。

森岡人形では雛人形の容姿を毎年、徐々に変えるため、その度に、頭の原型を改めて彫らねばならない。祖父や親父だけでなく代々、家業を継いだ森岡家の人間が彫っていたが、親父が亡くなってから

は宮沢が、ここ数年は峰もつくるようになったのだ。恭平もチャレンジはするものの、まだ採用されたことはない。正直なところ、これから先もまずないだろう。それだけヘタクソなのだ。

「桐塑も自分でつくってもらいますか」

恭平が宮沢に訊ねたところだ。

「つくります」溝口が言った。「ぜひやらせてください」

「それじゃあ、あっちのガスコンロに移動してもらおうかな」

「はいっ」

桐塑をつくるためには、まず生麩糊を鍋で煮るのだ。この段取りも恭平の役目だった。宮沢は腕を組んで見ていただけである。なにもしないのであれば、峰のように作業をすればいいのにと思わないでもない。うしろに立っていられると落ち着かないのだ。でもそれは恭平だけで、溝口はまるで気にかけていない様子だった。鍋の中に生麩糊を入れ、火をかけながら、柄の長いしゃもじでかきまわしているのだが、とても楽しそうで、いまにも鼻歌を唄いだしそうだ。

と想像していたら、ほんとに唄いだした。メロディだけが、しばらく聞いているうちになんの歌か、恭平はわかった。親父がよく口ずさんでいた歌だった。ふりむくと、宮沢も気づいたらしい。驚きからか、大きく目を見開いていた。

〈つづく〉